
翼の上のアリオン

-聖-

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

翼の上のアリオン

【Nコード】

N4107D

【作者名】

- 聖 -

【あらすじ】

大国ロフレスクを襲撃する謎の『鳥』と、鳥の背に乗る少女。ロフレスク王国防衛団の一員であるレザは迎撃をきっかけに彼女と接触し、やがて事件に巻き込まれていく……。人間と自然とをテーマにした、本格派ファンタジーです。

第1話 空からの強襲 1 .

フォルン大陸の北方を支配するロフレスク王国といえば、この半世紀で凄まじいほどの発展を遂げた国として有名である。森林を切り開き、土地を耕して、次々と工場を建設した。そして今となつては世界最大の工業国とまでいわれている大国だ。

そんなロフレスクの朝は、王国の中心部に高くそびえる『大地の塔』の鐘の音で始まる。ロフレスク産の中でも最高級の銀を使って作られたこの鐘の音色は、街の人々の心に響き、更には天地をも突き抜けるほどの澄んだ響きを持つのだった。

カランカランカラン。

午前8時。その日も、大地の塔の鐘が響くと同時に人々の忙しい朝は始まった。作業服に身を包んだ男たちが一斉に工場や炭鉱へと向かい始め、やがて煙突からは黒い煙がもくもくと上がる。また女たちはパン屋の看板を表に出し、あるいは談笑ながら農場へと向かい、町には活気が溢れ始めるのである。

すべてが平和に見えるロフレスクにも、しかし悩みの種があつた。それは防衛団の存在を見てもらえば分かるであろう。王城の周りには大した人数の防衛団は配置されていないのであるが、町の中、とくに郊外では、至る所に防護服に身を包んだ団員たちが立っている。ここ数十年間であまりに急激な開発を行ったために付近の森の生態系が崩れ、人々に危害を及ぼすような異常な生物が現れるようになった。彼らは繁殖力が以上に強く、ロフレスクの誇る近代兵器をもつてしても殲滅することはできない。仮に討伐のために森での攻撃を行えば、さらに生態系が崩れ状況が悪化しかねないのである。

そのため現時点では町の周囲に防衛団員を配置し、町に侵入しようとする生物のみを排除するという方法が最善であつた。その防衛団の拠点となるのが、東西南北とその間の計8箇所に建てられた通称『たいまつ塔』である。この塔の付近で危険を察知した場合、そ

れを周知するために塔の頂に炎が灯されることからそのような名前
で呼ばれている。

以前は森や山から下りてくる危険生物が発見されると炎が灯され
ていたが、近年はそれだけではなかった。空……そう、空からの侵
入者が、ロフレスクを脅かすようになったのである。

「『鳥』だ、『鳥』が来たぞ！」

防衛団員の男が叫ぶ声が聞こえた。それを皮切りに、平和だった
ロフレスクの東側の一角は突如として混乱に陥った。

東のたいまつ塔には大きな炎が灯され、付近の工場からは作業員
の男たちが我先にと飛び出してくる。その人々の間をすり抜け、た
いまつ塔に防衛団員たちが集まってきた。

東のたいまつ塔を指揮する『東の防衛隊』隊長であるコルダは、
塔の窓から彼方の空の様子を伺っていた。その隣では副隊長のモー
ジスが双眼鏡を覗き込んでいる。

2人はいずれも40歳前後の男で、小柄で落ち着いた雰囲気のお
るコルダに比べ、モージスは大柄で血の気の多い男だった。しかし、
このような対照的な性格の組み合わせであるからこそ、2人の見事
なコンビネーションの力が過去に幾度となく発揮されていた。

「またヤツか……。最近、ずいぶんと頻繁に来るようになったな」

コルダはあきれ果てたように言った。団員たちの間で『鳥』と呼
ばれているものは、近年このロフレスク王国に姿を現すようになって
た。工場ばかりを狙って破壊し、短時間で引き上げていくというパ
ターンはいつも同じである。防衛団も捕らえようとするのだが、鳥
の飛行速度は驚異的で、とても追いつくことができないのだ。

「ええい、トルカー隊の準備はまだか！」

モージスが額にしわを寄せながら荒々しく叫んだ。塔の下では団
員たちが慌しく飛行型機動兵器トルカーの作動準備を行っていた。
しかしそうしている間にも、次第に巨大な『鳥』が高速で接近して
きている。

「父さん！」

階下から、跳ぶような足取りで石段を駆け上がってくる若者がいた。彼はコルダの隣に立つと、窓から身を乗り出して遠くの空に目を凝らした。

歳の頃なら10代半ば。決して背は高くないが、鍛え抜かれた身体であることは一目で分かる。髪は父親のコルダに似たダークブラウンであるが、瞳の色は父親のそれとは異なる深い青。端正な顔立ちに、鋭さを持つ目が印象的な青年である。

「遅いぞ、レザ！ 何をやっていた」

「すみません」

モージスの怒声を、しかしレザと呼ばれた青年は慣れた様子で往なしながら、再び遠くの空へと目を移す。『鳥』はまるで防衛団の準備が整うのを待つかのように、減速をしながら近づいてきていた。とはいえ、その姿は肉眼ではつきりと確認できるほどの距離だ。

純白と黄金の美しい体に、真紅の輝きを放つ瞳。その体は両の翼を広げると20メートル近くにもおよび、天を裂くようなスピードで飛行をすることができる。

そして、その背に乗る1人の人間の姿。全身をゆったりとしたフード付きのロープで覆っているため顔は見えないが、『鳥』と共に必ず現れる謎の人物である。恐らくは『鳥』の持ち主ではあるうが、このロフレスクにやって来る理由を知る者などいなかった。

「今日こそとっ捕まえてやる。父さん、僕もトルカーで出ます」

たいまつ塔から次々と発っていく団員を見ながら、レザが革のグローブとゴーグルをはめる。そして腰に携えた折りたたみ式の槍があることを確認すると、コルダとモージスに軽く一礼をしてから石段を駆け下りていった。

耳障りな機械音を発しながら、トルカーのエンジンが火を噴く。空を飛ぶことを可能にしたこの高性能の機械は、ロフレスク王国が数々の失敗を乗り越えて向上させた技術の賜物である。中でも鉱物から抽出した特殊な燃料の開発がなければ、トルカーの実用化はありえなかった。

レザがトルカーに乗った時には、既に『鳥』はロフレスク領内に侵入してきていた。郊外に立ち並ぶ工場上空に滞空すると、その背に乗った人物が手で合図を送る。

すると『鳥』の全身が輝き、そのくちばしの中に巨大な火の玉を生み出した。そして工場に目掛けて放つ。

ドオオン！ という爆音と共に、工場が激しく炎上した。逃げ惑う労働者たちから絶叫にも似た悲鳴が上がり、付近は混乱の渦が巻き起こる。しかし、工場の中に残った人はいない。不思議なことに、この翼をもった破壊者による被害は物的なものだけにとどまり、過去に死傷者が出たことがないのである。

とはいえ、黙って見過ごすわけにはいかないことは間違いがなかった。そのための防衛団であり、これまでのように『鳥』を逃がし続けたとあつては、防衛団の面子にも関わる事だった。

やがて、たいまつ塔から発進したトルカー隊が宙に集まり始める。機体の側面には、『鳥』を捕獲するために考案された巨大なネットを打ち出す飛び道具を装着している。

しかし『鳥』はトルカー隊の接近を決して許さない。団員たちが集まってくるや否や、並外れたスピードで上空へと舞い上がった。恐らく引き上げるつもりであろう。毎回そうであるが、1回の『鳥』の襲来による被害は、平均して工場2つの被害程度なのだ。決して破壊の限りを尽くして去っていくことはない。多少の被害を加えると、すぐに逃げ出してしまうのである。

そして『鳥』が逃げに転じると、もはやトルカー隊では捕らえることができなかった。トルカーの発揮できる性能では、とても追いつくことが出来ないのだ。しかもトルカーに使われている燃料はまだ量産のできない貴重な資源であるため、追跡しても燃料切れになる可能性が非常に高い。あらかじめトルカー隊を領空の警備に充てることができないのは、このような理由もあつた。

しかし、その日は『鳥』にとって大きな誤算があつた。太陽の光を背に受けて、はるか上空から『鳥』めがけて下降してくる1機の

トルカーがいた。陽光のせいでその機影を捉えることが出来なかったのか、空へ上昇していた『鳥』は真っ向からトルカーと向き合う形となった。

そのトルカーを操っているのは……レザだ。ネット型の武器を使おうとするが、全身にのしかかる重力に耐えることに精一杯で操作に手が回らない。レザはゴーグル越しに真っ直ぐ『鳥』を見据えると、すれ違いざまにトルカーを強く蹴って『鳥』に飛びついた。

『鳥』は回避行動を取っていたが、間に合う距離ではない。レザは必死にしがみつき、『鳥』の翼にへばりつく形となった。そして器用に移動しながらその背によじ登る。

そのレザを、ローブをまとった謎の人物の持つ円形の武器が襲った。片手で翼を掴んでバランスを保ちつつ、空いた手で折りたたみ式の槍を組み立てるレザ。武術の腕は、ロフレスク最強といわれたコルダ直伝だ。

鈍い金属音が響き、2人の武器が交錯する。何度か打ち合いを続けるが、しかしどうやらレザの方が一枚上手のようである。やがてレザの繰り出した槍の柄が、相手のフードを剥ぎ取った。

「女!？」

レザは絶句した。フードの下から現れたのは、レザと同じぐらいの年齢と思われる少女だった。流れるようなプラチナの髪を後ろでまとめ、その顔立ちにはまだ幼さが残っている。彼女を一言で表現するならば、「神秘的」という言葉がぴったりであろう。澄んだ漆黒の瞳には、何か相手を気後れさせるほどの神々しい力があつた。

彼女は軽く唇を噛みしめると、鋭い視線でレザを睨み付けた。そして驚愕の余韻を残しているレザに不意打ちの体当たりを食らわせると、『鳥』に向かって大声で指示を出す。

「キュレイ、振り落とすよ！」

それを受けて、キュレイという名の怪鳥が、低空飛行をしながら徐々に速度をあげていく。少女に突き飛ばされたレザは、かろうじてキュレイの翼にしがみついている状態だった。

少女はトルカー隊の追っ手を振り払えていることを確認すると、キュレイに指示をして森の上を飛ぶようにさせる。レザを森の上に落とそうというのだ。

森の上までやってくると、キュレイは激しく翼をはばたかせ始めた。しかし、レザも負けじと必死にしがみつく。

「お、落ちてたまるか！」

「キュレイ、早く！ 大陸を抜けてしまおうわ」

なかなかレザが落ちないのを見て、少女が焦りの色を浮かべる。先のほうには海が広がっていた。ここはもう大陸の端。海に落ちれば、レザは無事では済まないだろう。

「く、もうダメだ…… もたない」

レザの手が、徐々にキュレイの翼から外れていく。悔しそうに唇をかみしめるレザ。だが、次の瞬間にはその手はキュレイの翼から離れていた。

「しまった！」

そう叫んだときにはもう遅い。レザの体は、下の森に向かってに落ちていく。そしてガサガサという音と共に、大きな葉を茂らせた木々の絨毯に受け止められた。恐らく大怪我をするには至らないだろう。

その様子を確認した少女は、思わず安堵のため息をついた。しかし、すぐに森の様子がおかしいこと気づき、その表情をこわばらせる。

吐き気すら感じる悪臭、茶色や灰色の植物、黒い木々、そして大量の塵を含んだ空気。まさに異常ともいえるこの森は、人々が決して近づかない呪われた森だった。

「よりによって『死の森』に……。キュレイ、大陸の端の海岸で待っていて。すぐ戻る」

その言葉が終わるや否や、少女はキュレイの背から飛び降り、深い森の中へと姿を消していった。

死の森 それはロフレスク王国の発展の犠牲になった自然の末路である。以前、この森は大陸で最も美しい場所といわれていた。水も豊富な上に、空気も澄んでいて、更には貴重な資源もそこらじゅうに埋まっている。まさに自然の宝庫というべき美しい森だった。だからこそ、ロフレスク王国に目を付けられた。発展途上の彼らにとつて、最高の環境を持つこの森は科学技術の実験を進めるのに最適だったのである。やがて森の中心部にマルスローム研究所が建てられ、ロフレスク王国の科学技術研究部の拠点となった。

しかし、15年ほど前に悲劇が起きた。それまで数々の研究を行い王国の発展に貢献してきたマルスローム研究所が、突如として大爆発を起こしたのである。さらに研究所からは多種の汚染物質や有毒物質が流れ出て、付近の森に充満した。

それ以来、美しかった森の環境は無残なものへと変わってしまった。大地も木々も死んだ。生物たちは命を奪われ、あるいは毒に犯され、異形の魔物のような存在になるものまで現れた。

やがてこの森は人々から『死の森』と呼ばれるようになった。人の存在を拒む、正に呪われた森。人間が足を踏み入れたならば、充満する毒気のせいで2時間程度すら生きることができないと言われている。

そんな森の中に落とされたレザは、茂る木の枝に絡め取られていた。汚染されているとはいえ、木はまだ生きていた。しかし、その葉は変色し、幹さえも灰色がかっている。とても見るに耐えない有り様だ。

レザは地面に降り立つと辺りの様子を伺った。この森が死の森と呼ばれていることは、当然ながらレザにも既知のことだった。しかし、実際に足を踏み入れるのは初めてである。

森は不気味なほど静かで、ときどき遠くのほうでカサカサと植物の揺れる音がする。今にもどこからか獣が飛び出してきそうな気配だ。とても落ち着いていられる状態ではない。

何よりも、森に満ちている汚れた空気が、徐々に肺を汚染してい

くのが分かるのである。長居をしている余裕はない。

「早く出ないと……このままじゃ死んでしまう」

鼻をつく悪臭に顔をしかめる。そしてレザは服の袖で口を覆いながら、森の中を宛てもなく歩き始めた。

そもそもこの森は、大陸の最東端に位置している。ロフレスクからみれば、ちょうど王国の南東にあるのだ。そのため、ロフレスクに戻るには、まず森の中を北西へと歩き、その先にある平原へと抜けなければならなかった。

しかし、レザは自分が方位を確認する術を持っていないことに気づき、ふと足を止めた。その上に森は広大な広さを持つため、命が尽きる前に抜けることができるかも分からない。

「ここまでか……。僕の道はこんなところで閉ざされてしまうのか」恨めしそうに空を見上げながら、そう呟く。木々の凶悪な影に阻まれ、広大なはずの空はわずかしが見えなかった。先ほどまで、あの怪鳥の翼に捕まって飛んでいた空が、この光すら届かない森と同じ世界にあることなど、信じがたい事実だ。

とはいえ、そのままじっとしているのはレザの性には合わなかった。何もできないときこそ、あがくべきである。そう父から教わった。

再びレザが足を踏み出そうとしたその瞬間、突如、刺すような圧迫感が襲い掛かり、何かが茂みの奥から飛び出してきた。姿を現したのは真っ黒い体を持った巨大なクモ。その大きさは人間と同じくらいはあるだろうか。この大陸の森に住む生物の中でも最も好戦的な、オニグモと呼ばれる厄介な相手だ。

「今日はつくづく運がないな。こんなことなら、無茶して『鳥』を追うべきじゃなかった。今さら言っても仕方ないけど……」

ため息混じりにそういうと、レザは折りたたみ式の槍を取ろうと手を伸ばした。焦りの色はない。なぜならば、過去にロフレスク領内に侵入しようとしたオニグモを何匹か仕留めたことがあるからだ。しかし、レザは思わず硬直した。常に携帯しているはずの槍がな

いのである。いくら戦った経験があるとはいえ、武器がなければどうにもならない。

「しまった……どこかに落としてきたか」

キュレイの背で、槍を使ったのを思い出す。恐らく森に落ちたときにどこかにいつてしまったのだろう。レザの額に冷や汗が浮かぶ。

そんなことはお構いなしに、オニグモは臨戦態勢に入っていた。大地に鋭い8本の爪を突き立て、姿勢を低くする。次の瞬間には、強烈な勢いでレザに襲い掛かってきた。

為す術もなく、逃げ回るレザ。最初の攻撃は上手く身をかわしたが、次も運良くかわせるとは限らない。しかも、どういつわけ敵の動きが予想以上に速いのだ。

続け様に繰り出される攻撃を横とびに回避しながら、レザは相手を倒す機会を伺っていた。しかし、わずかに回避が遅れ、わき腹に焼けるような痛みが走る。オニグモの爪の先に肉を引き裂かれたようだ。

地の上の転がりながら相手との距離を取ると、レザは傷口を押さえながら、その痛み表情を歪めた。このままでは、殺されるのも時間の問題だろう。

「やるしかない……。このまま殺されるなんて、絶対に御免だ」

決意を固めると、近くにあった太い木の枝を手取る。何もなければはましろだろうが、通じるかどうかは確証がない。いや、むしろ通じない可能性のほうが大きいだろう。それでも、何もしないまま殺されるのだけは嫌なのである。

「下がってなさい！」

レザが決死の覚悟で立ち向かうとした時、背後で誰かがそう叫んだ。聞き覚えのある声だ。パツと後ろを振り向くと同時に、ローブ姿の少女がその横を素早く通り過ぎていく。

突然の参戦者に興奮したのか、オニグモは不気味な雄たけびを上げながら少女に向かって鋭い爪を振り上げた。が、あつけなく少女の手にした円形の武器に、2本の足を切り落とされる。

「逃げます。走りなさい！」

オニグモが上手く体勢を立て直せないことを確認すると、少女はレザの手を掴んで走り始めた。足を失ったオニグモは満足に追うことができないようで、やがて2人の視界に入らなくなった。

「すまない……」

傷んだわき腹を押さえながらレザがポツリとつぶやく。しかし少女は振り向きもせず、強張った表情でただ前を見据えているだけだった。

ロープのふちを口に当て、毒気を吸わないようにしている。そのせいか、もしくは独り言だったのか、「気まぐれです」と少女は素っ気なく言った。

しばらく森の中を走ると、木々の間から蔦に覆われた廃墟が見え隠れしているのに気づく。石造りのその建物は、横には広いが高さはない。しかも天井の大半は吹き飛んでおり、壁も申し訳程度に残っていないかった。

レザと少女はどちらからというわけでもなく足を止め、不気味に佇む廃墟にゆっくりと近づく。残った壁の隅のほうに巣を作っていたモリネズミたちがその足音を聞きつけて散るように逃げていった。廃墟の横には、縦長の墓石のようなものが乱雑に突き刺されている。レザはそこに刻まれた文字をゆっくりと読み、再び廃墟を一瞥した。

「マルスローム研究所、ですか」

壁に這っている蔦を剥がしながら、少女が言う。

彼女の言うとおり、ここは15年前に爆発を起こしたマルスローム研究所だった。事故が起きて以来、数回の調査が行われた以外はほとんど人が近づいておらず、そのまま建物だけが残っている。

横に立てられた墓石はその事件で亡くなった研究員たちのために建てられたものだ。それを知ってから知らないでか、少女が墓石に近づき手で表面の塵を払った。

その瞬間、彼女の表情が一変した。おもむろにふところから円形

の武器、満月刀と呼ばれる珍しい刀を取り出すと、墓石と交互に見比べ始める。

不思議に思ったレザが横から覗き込んで見てみると、満月刀の刀身と墓石のてっぺんに、同じ紋章が刻まれていた。4枚の翼を持つ鳥をかたどったシンプルなものだ。恐らくは家紋なのだろうが、見慣れない形をしている。

「これは……」

少女はしばらく黙りこくっていた。なぜマルスローム研究所の墓石に自分の刀と同じ紋章が刻まれているのか、当の本人にも予想がつかなかったのである。

しかし、その沈黙は突如としてレザによってやぶられた。小さく呻き声をもらしながら、レザが地面に膝をついたのである。傷口が傷むのか、額に脂汗を浮かべながら必死にわき腹を押さえている。

「オニグモの毒……」

傷口が緑に変色しているのが見えた。オニグモの爪には致死性の毒があり、じわじわと人間の肉体を蝕んでいくのだ。治すには解毒作用を持つ虹色ガメの甲羅を削って飲むのが手っ取り早い。が、それもこの森を出なければできない話である。

レザは肩で荒く息をつきながら、近くの木を支えにして立ち上がった。死の森の空気のせいで余計に毒の回りが速いのか、顔色は青白く、足取りもおぼつかない。

それでも彼は喉の奥から声をひねり出し、必死に少女に向かって言葉をかけた。

「僕は……いい。君こそ、早く森を……出てくれ」

しかし少女は廃墟の上の方を指差しながら言う。

「あの上まで登る元気はありますか」

その指が示す先には、わずかな壁に支えられた廃墟の屋上が見える。幸運なことに、そこへ登る石造りの階段はボロボロになりながらも形を残していた。力を使ってよじ登るとなれば厳しいかもしれないが、階段を上がるぐらいならできそうである。

「……努力はするよ」

登る理由は分からなかったが、今のレザには彼女の言葉に従う以外なかった。その気になれば彼女はこの場でレザを斬り殺すこともできるのだ。何よりレザは、恐らく彼女が嫌いであるう口フレスク王国の人間なのである。

レザはゆっくりと足を前に出し始めた。既に視界は歪み、思う方向に進むのも辛い状態である。オニグモの毒のせいで息も荒くなっている分、死の森の毒気をより多く吸い込んでしまっているのだろう。

「くそっ」

我が身の不自由さに、レザは小さな声で悪態をついた。その横からスツと手が伸びてレザの肩を支える。レザは思わず少女の顔を見た。しかし彼女は無表情のまま支えの役割だけをしてきている。

「……名前は？」

「アリオン」

少女があっさりと自分の名前を口にしたことに、レザは驚きを隠せなかった。さっきまでは謎の『鳥』に乗った破壊者だったのに、今は彼女……アリオンが非常に身近な存在に感じた。それは恐らく自分の体を支えてもらっているからというわけではない。さっきまでのイメージと今のイメージとのギャップがあまりにも違いすぎるのだ。

声は凜としているが、決まってきた印象はない。むしろ柔らかい響きを持った優しい声である。しかもレザのことを気遣ってくれている上に、こうして助けの手まで差し伸べてくれている。果たして彼女は何を考えているのだろうか……レザの頭にはその疑問だけがグルグルと渦巻いていた。

そんなことを考えている間にも、2人は屋上の上に到達していた。するとアリオンは腰に付けた革の袋から小さな筒を出し、筒の穴の開いた方を空に向けた。廃墟が立っているため真上には木の枝も突き出ておらず、ほどよく白い雲に覆われた青空が見えている。

「音、しますよ」

パンツ！ という破裂音を立てて黄色い煙が空高く上る。さらに少し刺激的な甘酸っぱい匂いが風にのってあたりに散らばった。柑橘系の果物などを使って生成されたものだろうが、ロフレスクにそのような種類の果物はない。恐らくはアリオンの住む異国のものであろう。

やがてはるか上空に、雲を割って降下してくる1つの影が見えた。どうやらアリオンがキュレイと呼んでいた、あの『鳥』のようである。

「合図したら上に跳んでください。跳ぶのが遅れたら怪我しますよ」
「わかった」

レザはうなずくと、わずかに腰を落として身構えながら上から降りてくるキュレイを直視した。毒のせいで目がかすむが、あれだけの巨体である。さすがに見えないということはない。あとは体が言うことを聞いてくれれば無事に拾ってもらえるだろう。

やがて徐々に減速しながら、キュレイが大きくカーブをし始める。2人を翼ですくい上げるつもりなのだろうが……確かに跳ぶのが遅れたら大怪我だ。

レザは息を呑みながらアリオンの合図を待っていた。彼女は集中した視線を向け、必死にタイミングを計っているようだ。
「今っ！」

アリオンが声を張り上げると同時に、半ば反射的にレザは地を蹴った。キュレイによつて生み出された突風が2人の体を持ち上げ、そこをうまく翼で拾っていく。こぼれ落ちそうになりながらもレザはなんとかキュレイの背の上に転がっていた。

そのままキュレイは加速をしながら上空へと上っていく。レザは無事に死の森を脱出できたことに安堵のため息をついたが、その横でアリオンは後ろを振り返りながら唇をわずかに噛んでいた。

見ればロフレスク王国のトルカー隊が3人ほど森の上を飛行している。レザを探しに来たのだろうが、突然のキュレイの出現に焦っ

た様子で真っ直ぐと突撃をしてきている。

「掴まって下さい！ キュレイ、行って！」

人の言葉を理解することができるのか、キュレイはアリオンの言葉を受けて大きな一声を発した。そして翼を大きく広げ、さらに速度を速めていく。トルカー隊が引き離されていくのが目に見えて分かった。ロフレスクの技術力では、これほどの高速を体感できることはできないだろう。

もっとも、防衛団の仲間たちから逃げているというのは事実であるため、レザにとっては複雑な心境だった。かといって彼らと接触をすればアリオンは捕らえられてしまうだろう。そうなれば彼女は国の法により処刑か、もしくは牢獄行きである。

今までアリオンとキュレイによって攻撃をされていたのは確かであるが、レザには彼女が何か大きな理由を持っているような気がしてならなかった。これからキュレイに連れて行かれるところは、アリオンの住む場所であろう。そこへ行けば、その理由も分かるかもしれない。

「助かったよ。僕はレザ」

死の森を抜けたことで澄んだ空気を吸うことができ、わずかながらレザに生気が戻りつつあった。健常ならばオニグモの毒がすぐに全身に回ることはないだろう。それを見計らってレザは自分の名前を告げたが、アリオンはまったく相変わらぬ無表情で言い放った。「助けようと思ったわけじゃないですが、人が死ぬのは嫌いです。それに、ロフレスクの人間の名前にも興味ありません」

言っていることには棘があるが、口調は決まってきた。これが彼女の性格なのかどうかは分からない。しかしどうやら好かれているわけではないというのは、レザにも理解できた。

それからは会話がまったくない時間が続いた。まるで走るように過ぎていく大地を上から見下ろしながらレザは口を堅く結んでいた。たまにアリオンを見るが、彼女は少しもレザのほうを向く気配がない。

諦めたレザは深くため息をつく、そつと目を閉じた。熟睡して落下してはたまったものではないが、軽く休息をするぐらいの余裕はある。不思議なことに体に受ける風はトルカーに乗っているときよりもずつと少なかった。これならば、しばらくの間は落ち着いて体を休めることができそうである。

レザは今一度アリオンがこちらに顔を向けていないのを確認すると、器用に身体を丸めて瞳を閉じる。傷のせいで休息が必要なことも確かだったが、それ以上に、なぜか今日会ったばかりのアリオンに対して言葉にできない安心感を覚えているのだった。

第1話 空からの強襲 2 .

いくらも経たないうちにレザは目を覚ました。いよいよ本格的にオニグモの毒が体に回り始めたのか、手足の指先が痺れてきたのである。こんなことでは落ち着いて横になっていることもできない。

とはいえ実際、レザはそれまで熟睡をしていたわけではなかった。ただ目を閉じて休んでいただけ、というほうが正確かもしれない。何よりも傷が痛む上に、本来は敵であるはずの『鳥』の背の上である。傷が痛むからといって警戒は怠れない。

レザは体を起こすと地上を見下ろした。一体どの辺りを飛んでいるのかレザには見当もつかない。下には青く澄んだ海が広がっており、ずいぶんと波も穏やかである。ふと、海面にクロイル力が顔をのぞかせているのが目に入り、レザは思わず微笑んだ。

ロフレスク周辺の海は荒れていて色も綺麗ではない。汚染のせいか、もしくは元々そういう質の海なのかは分からない。しかし少なくともレザが知る限りでは、目下に広がっているような海とは比べものにならないほど淀んでいることは確かだった。

「傷はどうですか」

それまで黙ったまま正面を向いていたアリオンが、こちらに顔を向けもせずと言った。しかしレザは彼女に微笑みかけるように答える。

「大丈夫、ありがとう。でもちよつと毒の回りが早いみたいだ……」

「死の森に長くいすぎたかもしれないね。心配いりません。もうすぐ着きます」

レザはアリオンの肩越しに正面を覗き込んだ。はるか先のほうに大陸が広がっているのが見えた。飛行時間と方向からして、クルヒスト大陸の南西の辺りだろうか。それを証拠に、クルヒスト最大の山脈であるルートルア山脈と思われるものがどっしりと構えている。トルカーの免許試験を受けたときにロフレスクから200キロほ

ど離れた島に行ったことはあるが、ここまで長距離の遠征をしたのは初めてだった。トルカーで移動したのではここまで燃料が持たないだろう。それこそ昨年完成した飛行艇スカイロードがなければ来られない。

わき腹が痛むのもすっかり忘れ、レザは見たことのない美しい景色に目を奪われていた。雄大で、どこか懐かしい印象のある大自然。ロフレスク周辺にもかつてはこのような綺麗な風景が広がっていたのであるうか。

「降りますよ」

アリオンの言葉を合図に、キュレイが少しずつ高度を下げ始めた。どうやらルートリア山脈の中腹あたりを目掛けて降下しているようである。

それにしても、これからどこに連れて行かれるのかレザには皆目見当もつかなかった。彼女の生まれ育った村へ向かっているかとも思ったが、彼女が村に住んでいるのかどうかも分からない。

もっとも、それは行ってみれば分かることである。何より今は彼女に言われるがままについていく以外の選択肢はなかった。事実上、自分の命は彼女の手の中にあるといっても過言ではないのだ。

色鮮やかな緑の樹海の上を飛ぶことしばらく。次第に近づく雄大なルートリア山脈の存在感に、レザは圧倒されていた。山の頂が非常に鋭利で、まるで尖塔のような形のものもある。そうかと思えば緩やかな曲線を描いて延々と広がりを持つものもあり、見ているだけで心躍るような山並みだ。

クルヒスト大陸はこのような大きな山々を多く有している。そのため常に谷間から吹き抜ける風が、時として人々の生活に災害をもたらしてきた。この大陸ではその風を神として崇める信仰が今でも盛んであり、『風の神』の神話が星の数ほど存在している。

もっとも、そのような自然神の信仰は、なにもクルヒストに限ったことではない。例えば豊かな大地を持つフォルン大陸では昔から『地の神』の信仰が盛んに行われてきた。急速な発展のために森の

生態系が崩れ、ロフレスク王国に異形な生物がやってくるようになったのが、『地の神』の祟りであると信じている人は、王国内において決して少数ではない。それだけ地域に根付いた自然神の信仰というのは、どここの大陸にもあるのだ。

レザが辺りを見回しているうちに、キュレイは木の生い茂った崖の一角を目掛けて降下していた。人為的に作られたものか自然にできたものなのかは分らないが、細々とした枝を持つ背が高い木々がアーチ状に伸び、トンネルのような道を作り上げているのが見える。恐らくそこがキュレイの巣なのであろう。もしくはアリオンもそこで生活を共にしているのだろうか。

「降りますから、しつかり掴まっけていて下さい」

アリオンに言われ、レザがキュレイの背中にしがみつく。それとほぼ同時に、キュレイは大きく翼を広げて着地の態勢を取った。

山を吹き抜けていく風に乗り、ふわりと滞空するキュレイ。そのおかげで着地時の衝撃はレザが予想していたよりも少なかった。降りるというよりは、乗ったという表現のほうが合っているかもしれない。

レザが着地に備えて身構えているのを尻目に、アリオンはキュレイの脚が地に着くや否や、その背中から飛び降りていた。

「ここで待っていてください」

そう言い残し、アリオンがトンネルの奥へと姿を消す。

それを見送ってからレザはキュレイの背から降りた。地面に足をついた瞬間、バランスがうまく取れずによるめく。オニグモの毒のせいで足の先が痺れているのだ。足だけでなく、手の指先も感覚がなくなってきた。

「まいっ たな……」

よろよろとした足取りで崖のふちに移動し、今一度あたりの景色を眺めてみる。フォルン大陸にはあまり高い山がないため、こうしてのんびり大地を見下ろすというのは初めての体験だった。

山の麓には大きな湖があり、その中心に祠が立っているのが見え

る。それ以外には特に目ばしいものが見当たらなかった。村や集落があるわけでもなく、ましてや大きな街などもない。あるのは自然に支配された緑の風景のみである。

レザは踵を返すと、キュレイの元へと戻っていった。改めて見るとなんと巨大な鳥である。今は大人しくしているが、ロフレスク襲撃の際には口から吐く火の玉に誰もが恐怖していた。

しかしいざこうして近くで眺めてみると、さして凶悪そうな感じではない。黒く大きな目など吸い込まれそうなほど美しく輝いているのだ。

「ちよつと……ゴメンよ」

レザが腰を低くしながらキュレイの正面へ近づき、恐る恐るくちばしに触れてみる。キュレイは別に嫌がる様子ない。むしろ表情が和んでいるかのようなのである。そのままくちばしを撫でてやると、目を閉じてリラックスしたような仕草をとった。

どうやらあまり嫌われているわけではないらしい。レザはわき腹の痛みにかすかに表情を歪めながらも、キュレイの可愛い様子に口元を緩ませた。

ちよつどその時、アリオンがトンネルの奥から姿を現した。そしてレザとキュレイの様子に目を丸くしながら「あつ」と小さく声を上げる。驚いたレザは慌ててキュレイのくちばしから手を離すが、アリオンは小さく咳払いをしてから、何事もなかったかのように口を開いた。

「長老から許可が出たので、ひとまず村にきてください。解毒剤がありますから」

「うん、ありがとう」

レザは、まずアリオンが村の中で暮らしているということに驚きだった。しかしそれ以上に驚くべきことは、自分がすんなり村に入れるということである。何よりロフレスクはアリオンにとって敵である。ということは、村人たちにとってもロフレスクには何かしらの敵意があるに違いない。それなのに、ロフレスクの人間であるレ

ザが受け入れられるというのはどういう事情であろうか。

口ではお礼を述べながらも、レザは内心かなり警戒していた。もしかするとアリオンは村人にレザの素性を話していないのかもしれないが、いずれにしろ油断は禁物である。村に入った瞬間バツサリやられてしまうのだけは御免だった。

無言で歩き出したアリオンの背を追って、レザはトンネルに入ろうと足を踏み出した。しかし毒の痺れのせいで足が思うように動かない。やつのことで一歩前に入るものの、とてもまともにアリオンの後を付いていくことなどできそうになかった。

オニグモの毒の強烈さも原因だろうが、やはり死の森にマスクもせずに長居したことが大きな要因だった。自然というのは汚染されるにしてもゆっくりと時間をかけて進むものであるが、あの森の毒気は異常なほど急速に広まったのである。

必死にアリオンの姿を目で追いながら、薄暗い植物のトンネルを進むことしばらく。山の斜面にポツカリと口を開けた洞窟に入っていく。

洞窟の中に日の光は届いていなかったが、ところどころに這っている蔦が発光しているおかげで、全く何も見えないというほどの暗さではない。

「……大丈夫ですか？」

さすがにレザのことが気になったか、アリオンが振り向き、心配そうに声をかける。

なんて優しい子だろう。レザは素直にそう感じた。

先ほどまで刃を交えていたとは、とても思えない。少なくともレザは彼女を敵であると思っていたし、彼女もレザに対して憎悪を抱いていたことだろう。

もしかすると、本当は優しい性格の持ち主なのかもしれない。しかし、何か大きな理由があって口フレスクを襲ったとすれば……。アリオンへの敵対心はすっかり消え失せ、レザはアリオンが自分の国を襲う理由を探ってみたくなった。それを聞き出すことで、ア

リオンと対立をなくす解決策が見つかるかもしれない。そんな期待を抱いていた。

「なんとか大丈夫。ありがとう」

表情を歪めながらも、ぎこちなく笑顔を浮かべてそう答える。

しかし、そんな作り笑いでは隠せないほど、レザの様子は苦しそうだったであろう。アリオンはスツとレザの横に並び、

「肩、貸します」

と小さな声でつぶやきながら、レザの体を支えた。

真珠草で作った香水だろうか。自然の甘い香りがふわりと漂う。

昔はロフレスク周辺にも多く見られたらしいが、レザは野生の真珠草というのを見たことが無かった。ただ、母親が若い頃によく真珠草の香水をつけていた、と父親のコルダから聞かされたことはある。

レザには母親がいない。レザが幼い頃に、重い病で倒れたと、コルダは言っていた。ロフレスクの自宅の裏に、母親の小さなお墓がちょこんと建っており、そこにかけられた母親の形見のペンダントだけが、レザにとって唯一の母親の姿だった。

そのせいだろうか。アリオンに対し、安らぎを感じてしまう自分がいるのだ。

「もうすぐ着きます」

アリオンに言われ、レザは顔を上げた。いつの間にか、ずいぶんと歩いていたらしい。洞窟の幅が広くなり、わずか先に光が溢れていた。

出口を覆う植物を掻き分け、洞窟の外へと足を踏み出す。

「……すい」

一瞬、毒による苦痛をも忘れ、レザが感嘆の声を漏らした。

大樹の隙から降り注ぐ陽光に照らされ、小さな集落が姿を現す。それはまさに自然との共存といってもいいかもしれない。洞窟の先には、それまでレザが見たこともないほどの巨大な木々や草花があり、その間に家が建っているという状態だ。

洞穴はちょうど崖の側面に口を空けており、その集落一帯の周り

も高い崖で覆われている。まるでその集落が1つの広場であるかのように。

「こちらへ」

レザが絶句しているのを尻目に、アリオンが腕を引いて集落の方へと歩いていく。

行き先は、なんとなく予想がついていた。歩く先のほうに、ひときわ大きな建物が見えている。大きな樹の脇に立ったその家は、半ば樹木を家の壁の一部としているように見えた。いや、その家が樹のほんの一部といったほうが正確かもしれない。

レザはアリオンに体を支えられながら、その家の中に足を踏み入れた。

「クシュリ様、連れてきたよ」

アリオンにクシュリと呼ばれた人物は、大きな部屋の中央に敷かれた、やけに分厚いクッションの上にずしりと腰を下ろしていた。年の頃なら……おそらく100歳に近いのではないかと思われる老婆である。額に深々と刻まれた皺が、その生きてきた年月の軌跡を物語っている。背は低く体も小さいが、えもいえぬ威圧感が部屋全体に充満していた。

その神をかたどった石像のようなクシュリが、レザの顔を見た瞬間に、わずかに表情を変えたことに、アリオンもレザも気づかなかっただろう。そのまま彼女はまじまじとレザの顔を眺めると、

「……飲ませてやりな」

部屋の隅にある棚を軽くあごで指し、そのまま口を固く結んでしまった。

アリオンは棚に並ぶ小瓶の一つを取ると、中に入っていた小石ぐらいの丸薬をつまみあげた。オニグモの毒に対する解毒剤はの虹色ガメの甲羅を削って作ったものが一般的だが、どうやらその薬は違うらしい。甲羅を原料とする薬は淡い水色をしているのだが、こちらの薬は白に近い黄色といったところか。

「神鳥の……キュレイの羽毛を煎じて丸薬にしたものです。飲んで

ください」

キュレイの羽毛から作られたというのも驚きだったが、何よりもアリオンがキュレイのことを神鳥と言ったことに、レザは驚きを隠しきれなかった。

あの鳥が神の使いだというのだろうか。確かに、いわゆる怪鳥と呼ばれるタイプとは、どこか違うことはレザにも分かっていた。それこそ体が大きいだけの鳥ならば、ロフレスク大陸の小さな山脈にも生息しているのだ。

しかしキュレイは違う。知能も高く、姿も神々しく、炎を吐く。神鳥といわれれば、納得せざるを得なかった。とはいえ、神鳥というのは世界に数羽しかいないという神々の産物である。それがこのような山奥の小さな村で、アリオンのような少女とともにいるとは……。

レザが口を開けると、アリオンは丸薬を入れてやった。決して美味いとはいえない。パサパサとしていて、口の中がザラつく感じがさえる。しかし気のせいだろうか。口を起点に、体中がスーッと軽くなっていくのだ。

昔から、神鳥の体は薬の塊だと言われている。『神鳥の肝を食べれば不老不死になる』のようなありきたりなことが、多くの伝説書や医学書などの記述されているのだ。

1000年ほど前は数の多かった神鳥も、不老不死を求める人間の乱獲のせいで減ってしまった、という学者もいる。

しかし実際はそうではない。確かに神鳥は昔に比べその数を減らしていると言われているが、神鳥は人間に殺されるほど弱い存在ではないのである。誰も神鳥を殺すことができなかったからこそ、不老不死などという噂が一人歩きしたのだろう。

「……アリオン、少し外しておくれ」

クシュリの言葉に、アリオンは目を丸くした。しかしすぐにコクリとうなずくと、レザの顔を目の端で確認しながら、静かに外へ出て行った。

「まあまあ、座りんさい」

そう促され、レザは倒れこむようにして床に腰を下ろした。不思議なことに、先ほどよりもずっと痛みや痺れは少ないのだが、体が妙に重い。それでもレザは平然とした顔をして真っ直ぐとクシユリのほうを向いて座っていた。

クシユリはしばらくの間、なにやら口をモゴモゴと動かしていたが、やがてふと顔を上げ、口を開いた。

「何をしにこの村にきたのだ」

それはレザがまったく予想していなかった問いかけだった。

何しろ、別に自分で来ようと思ってきたわけではない。アリオンに連れられたから、ここにいるのである。それはクシユリもアリオンから話を聞いて分かっているのではないのだろうか。

しかし、クシユリが何かレザに対して懐疑心を抱いているというのも、口調や仕草からうかがい知れた。レザに不信感を寄せる特別な理由があるのか、もしくはただ外部の人間に対して排他的であるだけか……。

「怪我をして動けなかったところを、アリオンに助けられました」
とりあえずレザは素直に答えた。しかし、クシユリからの反応は何もない。ただ高齢のせいでもうろくしているというわけでもないのだろう。

彼女が口を開かないのを見て、今度はレザが訊ねる。

「なぜ彼女は……アリオンは、ロフレスク王国を襲うのですか。あんな女の子が……」

クシユリは細い目をわずかに見開いた。

吸い込まれそうなほど深い眼光を放つ瞳が、レザに向けられる。眼力だけで気後れしてしまいそうな圧迫感。しかしそれに対してもレザは決して怖じる姿勢を見せない。

そんなレザを見て、クシユリがかすかに口元を歪めた気がした。それが微笑んだのか、それとも嘲笑なのかはとても判断がつかない。そのまま彼女はゆっくりと口を開く。

「われら『深緑の民』は、オトコ、オンナとは呼ばぬ。壊し人、創り人……とは呼ぶがな。もっとも、お主には理解できなかるう」

まるであざ笑うかのような口調。レザが何か言葉を発する前に、クシュリは続ける。

「アリオンは壊し人の道を選んだ。ただそれだけのことじゃ」

レザには彼女が何を言っているのかが、まったく分からなかった。そもそも、レザが過ごしてきた社会の文化とは違いすぎるのだ。細かく説明をしてもらえなければ到底分かるわけもない。しかしそれきり、クシュリは口を開かなくなってしまった。

レザは続けて聞こうとした。ロフレスクを襲う理由はなんですか。だがその言葉はレザの口を出ることがなかった。ふいに体がフワリと浮くような感じに襲われ、意識が朦朧としてくる。今までに味わったことのない強烈な睡魔だ。

「なあに、ただの薬の副作用だ」

そう言いながらクシュリは静かに目を閉じる。もうこれ以上話すことなどない、と言わんばかりに。しかし床に倒れこむレザの耳に、クシュリの声はすでに届いていなかった。

レザが倒れこむ物音に気づいたアリオンが、おそろおそろ中の様子を覗いていた。レザが完全に眠っているのを確認すると、そっと室内に足を踏み入れる。彼女はもの珍しそうにレザの姿を眺めると、
「変わった人」

と、小さな声でつぶやいた。

目を閉じていたクシュリの瞳がゆっくりと開かれる。じつとアリオンの顔を眺め、驚くほどハッキリとして口調で言った。

「気になるかい」

クシュリが何を意図しているのか分からず、一瞬戸惑いの色を浮かべるアリオン。しかしすぐに小さくうなずき、

「なんとなく……。部外者がここに来るのは初めてだし」

と、言葉を濁しながらも答えた。

「さあ、国に帰ってきておやり。その毒の進み具合だと、半日ほど

は起きんじやろうて」

「……うん、行ってきます」

アリオンは小さくお辞儀をするとそのまま静かに部屋を出て行った。それからしばらくして、アリオンと同じぐらいの年齢と思われる少女を連れてくる。

短めの髪とハッキリした顔立ちが特徴的で、アリオンとは対照的に、活力にあふれた印象を持たせる。少年のような雰囲気を感じるのだが、出るところはしっかり出ており、背も体格もアリオンよりも少し大きかった。

「そんなに重そうじゃないから、2人で運べると思うんだけど……どう、ベーベル？」

「へー、可愛い顔してるね」

ベーベルと呼ばれた少女は、アリオンの話などまったく聞かず、静かに寝息を立てるレザの顔を覗き込んだ。その様子を見て、アリオンが頬を膨らませてみせる。

「もう、ちゃんと聞いてよ……」

「はいはい、すぐカリカリしないの」

ベーベルにおでこを人差し指で突かれ、アリオンはさらに不機嫌そうな顔をした。非常に意外なことではあるのだが、どうやらアリオンは感情を隠すのが苦手らしい。微かに赤くなったおでこをさすりながら、露骨ではないが、しかし目に見えて不満の表情を見せていた。

2人はゆつくりとレザの体を動かし、外へと運んでいく。家の前には、仔馬ほどの大きさはあろうかという白い犬が、座り込んで待っていた。

「行ってきます、クシユリ様」

レザを犬の背に乗せると、アリオンはクシユリに軽くお辞儀をし、ベーベルと共に歩いていく。元来た洞窟を戻り、キュレイの元へと向かうのだ。

洞窟を抜けると、キュレイは眠そうに地面に体を下ろしながら待

っていた。そんなキュレイに近づく前に、ベールは足を止める。

「怒られると嫌だしね。このへんで止まっとく」

アリオンはコクリとうなずくと、レザを乗せた犬を連れてキュレイの元へ歩み寄った。

後ろの方で待つベールの姿と、レザの姿とを交互に見る。アリオンは非常に不思議だった。キュレイは、アリオン以外の人間に対してはあまり気を許さないのだ。ベールがああして近づきたがらないのも、そういう理由がある。

しかしレザは……村に向かう前、キュレイに触れていた。しかもキュレイが最も警戒をする、正面から、である。

本当に、不思議な人……。

すやすやと眠るレザの顔をもう一度ゆっくりと眺めながら、アリオンはキュレイの横に回った。

犬の背から、レザをキュレイの背に移す。本当に嫌いな人間が相手ならば、キュレイは決して背に乗せようとは思わない。それなのに、レザを乗せようとしてもまったく嫌がる様子がないのである。

「行ってきます。すぐ戻ってくるわ」

「はいよー、お土産よろしくね」

呑気な口調でベールがパタパタと手を振りながら見送りをする。下に落ちないようにレザの体をしっかりと抑え、アリオンがキュレイの背中を撫でる。するとキュレイは大きく伸びをするかのように翼を左右に広げた。

この神鳥が飛び立つときの姿は、多くの地方や国で神格化されている、象徴的な姿である。この姿を模した紋章を掲げる王国などが、世界には多数存在するのだ。もっとも、アリオンは相棒が飛ぶ準備をしている、ぐらいにしか思っていないだろうが……。

キュレイは姿勢を低くすると、大地を蹴って上空に飛び上がった。レザの体がグラリと揺れるのをアリオンが慌ててしがみついて押さえる。

「お熱いねーっ！」

なにやら下のほうでベールがはやし立てていたが、アリオンは顔を赤くしながら聞こえない振りをしていた。「落ちないように押さえてるだけだもの」と心の中で呟きながら。

海面よりはるか上空を飛びながら、アリオンはレザを連れてロフレスクを目指した。

第1話 空からの強襲 3 .

レザはぼんやりと天井を眺めていた。どうやって運ばれてきたかは分からないが、目を覚ますと自宅のベッドの上に横たわっていた。結局アリオンについて何も聞けぬまま戻ってきてしまったことを、レザはひどく悔しんだ。しかし、彼女とはまた話す機会がある気がしていた。理由は分からないが、すごく運命的なものを感じるのである。

ふと、戸棚の上に置かれた写真立てに目をやる。可愛らしい鳥の絵が描かれた枠の中で、コルダと、そして生まれて間もないレザを抱えて微笑む母親の姿が映っている。

レザは物心がついたところから、母がいなかった。昔から体が弱く、病気で亡くなった、とコルダからは聞かされている。気が強い反面、動物が大好きなやさしい一面もあり、中でも鳥が大好きだったという。

キュレイという神鳥に乗って大空を飛びまわるアリオンに、どこか母親の影を求めているのだろうか。ベッドの上でレザは何度も自問自答した。

「目が覚めたか」

いつ帰ってきたのか、コルダがベッドの脇に立っていた。安堵の表情でレザの顔を上から覗き込む。気まずさを覚え、レザは目を少しそらしながらボソリと言った。

「……ただいま」

「まったく、無茶をする。そういう所は母親にそっくりだな」

溜息をつきながらそう言うと、コルダは台所に立って何かを作り始めた。どこか嬉しそうな父親の背中を眺めながら、レザが思わず微笑む。昔から無茶な行動をすると、父親には嬉しそうな顔をしながら怒られていた。

今アリオンのことを話せば、父親は協力してくれるだろうか……。

しかし、コルダに話を通してしまうと、王国の上層部が絡んでくる可能性がある。再び自分自身でアリオンの元を訪れ、暗闇に埋もれた真相を掘り出すのが一番納得のできる道であることは間違いないかった。

しばらくして、レザはコルダとともに夕食をとった。もちろん、食前に地の神への祈りも怠らずに行う。食事の前に手を合わせ、地の神への感謝の言葉を述べる。この国では、誰もが行う一般的な習慣だ。

今日のメニューはアカマキノコのスープと、シロブタの肉とたっぷりの山菜を使った炒め物。食事作りレザとコルダが日替わりなのだが、レザはあまり料理が得意ではなかった。それに比べてコルダの料理の腕は王国内でもちよつとした噂になるほどだ。

「それにしても、一体どこへ行ってどうやって帰ってきたんだ」

スープを口に運びながら、コルダが足踏みするような口調で言った。どうやらずっと聞くタイミングをうかがっていたらしい。

レザは悩んだ。当然そう聞かれることは覚悟していたし、多少は自分の見聞きしたことを話さなければならぬと思っていた。しかし、いざ質問されると、どうしても答えには詰まる。

なにしろアリオンは王国の敵として認識をされている存在である。その彼女にオニグモから受けた毒の治療を受けて、ここまで送ってもらったと言うのは……少し口が重い感じがする。何より真実を話した場合、父親がどのような反応を示すか検討がつかないのが怖かった。

「明日から、鳥捕獲のための本格的な作戦が始まることになった」
レザが口を開かないのを見て、コルダはそう話を切り出した。その話は、少し前からレザも耳にしていた。確か作戦の指揮は北側の防衛団を任されているボーダンという男だったと記憶している。

正直なところ、レザはボーダンという男が嫌いだった。彼は非常に好戦的なことで有名で、過去の作戦でも正当といえるような内容のものばかりではない。しかし、彼の作戦はよく成功する。荒々し

いながらも、ボードンが防衛団の一角を任されているのは過去の実績の賜物だった。

恐らくアリオンが捕まってしまうえば、牢獄行きか……最悪の場合には処刑もありうる。いずれにしろ無事では済まない事は確かだった。そうなることは何としても避けたいが、過去にアリオンが口フレスクに対して破壊行為を行ってきたことも事実。レザが彼女の解放を訴えたりしようものなら、レザにも罰が与えられることは必至であろう。

「レザ、ちょっとは何か喋ったらどうだ。あまり難しい顔して考えこんでいると、頭がパンクするぞ」

コルダがそう言いながら右手でポンツと破裂するような動きを試みせる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4107d/>

翼の上のアリオン

2010年10月8日23時58分発行